

1冊の教科書を2年間で終わるって？

伊川 徹

IKAWA Toru

Université d'Ashiya

ikawa@ashiya-u.ac.jp

1週1コマ或いは2コマで、2年間の第2外国語の授業が設定された大学では、本論のような暴挙は許されないであろう。弊学では基礎教養科目(外国語)として、英語・フランス語・ドイツ語・中国語・韓国朝鮮語・ロシア語・日本語(留学生のみ必修)が開講されており、全学の学生に、この中から1言語を選択させ、1週1コマの授業を1年半(6単位)必修させる。学生の人気度も長年上述の順序とて、これも他大学とは趣を異にする。しかし、小学校5・6年生に対する外国語(英語)教育が始まって以来、新学習指導要領(第4章外国語活動)に明記されていないにも関わらず、児童教育学科では小学校教員免許状の取得希望学生は英語・中国語・ドイツ語のいずれかを選択必修する(理由が解らぬ!)ように指導され、英語以下の順位が目下ドイツ語・中国語・フランス語と入れ替わりつつある。

弊学には臨床教育学部(教育学科他2学科)と経営教育学部(経営教育学科)が設置され、1学年の定員は250名である。入学式の翌日に新入生オリエンテーションが実施され、新1年生は外国語のクラス分けテスト(英語)を受験する。事前に第1希望から第6希望まで履修科目についてのアンケートが行われており、圧倒的多数の英語の履修希望者を成績順に30名単位の習熟度別6クラスに振り分ける。残りの70名前後が第1希望として他の外国語を選択した学生諸君だが、両学部外国人留学生には日本語を必修させ、国際コミュニケーション教育科生(定員20名)には第1外国語として英語を、第2外国語として残りの5言語(日本語を除く)から1言語(但し、留学生は日本語)を履修させ、それぞれ1週1コマの授業を2年間(16単位)必修させる。

弊学の授業時間割は1日4コマ(1時限目は10h00~11h30、4時限目は15h30~17h00)で、土曜日にも授業の配当があり、1週間の総コマ数は24コマである。語学教育は毎週木曜日の2時限目(12h10~13h40)と3時限目(13h50~15h20)に集約されており(ご出講頂くドイツ語・中国語・日本語の非常勤講師各位にはご迷惑な話だ!),フランス語のクラスでは、1年生は前期の2時限目にfrançais-Iを、後期はfrançais-IIを履修する。また、2年生は前期の3時限目にfrançais-IIIを、後期はfrançais-IVを履修するが、各言語I~IVの中、IIIまでが必修であるので、IVについては、基礎教養科目の自由選択科目という位置づけである。その所為か、2言語共にIVまで16単位必修の国際コミュニケーション教育科を除き、どの言語もIVのクラスで受講生が激減する。しかし、それでも善しとすべきなのである。何故なら、余談であるが、10年ばかり以前に弊学教授会で、「英語のremedial teachingこそ必要な現状であり、第2外国語どころではあるまい」という第2外国語不要論

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

が台頭し、これに対抗すべく、「一から学び直すというのであれば、英語も第2外国語も立場は同じではないか？」と論陣を張ったところ、予期せずこれが奏功し、現状の6言語から1言語を選び、必修とする制度に落ち着き、弊学の第2外国語は滅亡を免れたからである。猶、当然ながら、1年生の前期はフランス語、後期は英語、2年生の前期は中国語などの捩れ履修はできないので、1年生の前期に1言語を選択して履修し、後期へとこの学習を継続しつつ、2年生前期から他言語Ⅰ（1年生配当）を平行して履修することは差し支えない。

さて、20名前後のフランス語履修者の大半は（筆者が初めて教壇に立った40年前から）常に女子学生だが、フランス語やフランス文化について、往年の如き予備知識を持った者は皆無である。この人びとに1年半或いは2年間で必要にして十分なフランス語・フランス文化教育を行うには、どういう教科書が最適で、それを如何に活用できるだろうか？本論では、この制度/条件下の教科書選定と教育に言及する。

*

2010年度は新1年生用に小笠原洋子著、白水社刊の *Pierre et Hugo* (CD/DVD 付・2,625円) を、2011年度は藤田裕二著、朝日出版社刊の *Le Japon, c'est cool!* (CD/DVD 付・2,625円) を採用した。恐らく日本中の多くの大学・短大でこれらが1年間で消化される訳だが、筆者担当のクラスでは、これらを敢えて2年間で終えようというのである。また、特殊事情であるが、25年前に刊行したものの、当該出版社の廃業によって在庫処分される筈であった自作の文法・読本テキスト *LE FRANÇAIS IDÉAL* を貰い受け、長らく保管していた。これを両年度共に学生諸君に無償配布して、補助テキストとした。出版業法上、些か問題のある行為かも知れないが、長い年月が経過し、輪郭が黄ばむなど商品価値は殆どないものとして、学生諸君にプレゼントする分には許容範囲内の行為かと考える。しかし、これが仇となって、教科書は無償配布されるから、買わなくても良いのだと考える学生の出現を助長したようだ。

猶、シラバスに仏和辞典を3種類紹介し、「各自で購入のこと」と伝えてあるが、2～3名が「電子辞典に『クラウン仏和辞典』（三省堂）が入っているので、購入しなくても構いませんか？」と尋ねるので、「検索中の単語のみならず、派生語など関連項目全体が俯瞰できますから、なるべく紙媒体のものをお薦めしますけど・・・」と答えている。しかし、残りの全員が頑として購入を拒むのが常である。それどころか、2～3名の学生が上記のテキストすら「値段が高い！」などと称し、遂に最後まで購入を拒否する始末である。「剣道を教わりたいと現れた者が、防具は値段が高いので購入しませんと言えば、師匠はこの者に指導が可能か？」と返しても、「Coach 製の高価なバッグを買う前にテキストを買えば？」とコーチしても、「土佐でも Coach は買える？」の余計な一言の所為か全く効果なしだ。

さて、シラバスの授業計画（内容と方法）には1回目から3回目まで「フランス語での自己/他者紹介」「やはりフランス語での・・・」「これでもかとフランス語での・・・」と記してあり、この間には附属のDVDに加え、嘗て使用した他社のテキストに附属のDVDやVIDEOを織り交ぜ、alphabetや綴字の発音と読み方を学

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

ばせつつ、担当者（筆者）はこの間殆ど日本語を使わずに、最初の学生に《Bonjour, mademoiselle.》《Bonjour, monsieur.》/《Ça va?》《Ça va, merci.》/《Je m'appelle Toru IKAWA. Et vous?》《Je m'appelle Erika YAMADA.》/《Ah, bon? Vous vous appelez Erika YAMADA, hein? Moi, je m'appelle Toru IKAWA.》と遣り取りし、これを聞いていた別の学生に《Bonjour, monsieur. Ça va?》《Ça va, merci.》/《Elle s'appelle comment?》《Elle s'appelle Erika YAMADA.》/《Et vous, vous vous appelez comment?》《Je m'appelle Takeshi NISHINO.》・・・と20名前後の学生諸君に次々と自己/他者紹介の連鎖問答を繋いで行けば、初日から自分のこと、第三者のことをフランス語で話せる喜びに浸れる（とシラバスにも書いてある）のである。

こうして毎回20～30分の時間配分で授業への導入を図り、「頭中（あたまじゅう）フランスになったねえ！」とテキストの内容に移行するのだが、4回目の授業からはこの時間を短縮して、10～15分程度に収め、テキストの主題に沿って、Leçon 1なら自己紹介、Leçon 2は *Qu'est-ce que tu as?* に対して *J'ai~* で答え、Leçon 5は *Où allez-vous?* や *D'où venez-vous?* にそれぞれ *Je vais à~*, *Je viens de~* と答えることが主題であるので、それらに合わせた内容で担当者と学生及び学生同士の間での遣り取りを実施する。余談だが、キャンパスで擦れ違う総ての学生に筆者は《Bonjour! Ça va?》と挨拶をするので、誰も彼も、洗脳されて? 《Bonjour, monsieur!》と *monsieur* まで付けて返して来るようになり、《Ça va?》に《Ça va, merci.》と反応する者も現れ始めたのは、フランス語のクラスで板書した「鯖?」「鯖飯!」の情報漏洩? かも知れない。

*

さて、*Pierre et Hugo* はそれぞれ14歳（の方が大きい!）と15歳の少年がParisから南仏の田舎町でホテルとカフェを営んでいるHugoの叔母Nadiaを訪ねる旅に出るという筋書きで、全18課で構成され、各課にはGRAMMAIREと本文に沿ったEXPRESSIONS、新出語彙を確認すべくVOCABULAIRE、それらに練習問題が続くという構成である。本文の各課で交わされる3～4行のDIALOGUEはDVDの動画でPierre MACHKOVSKYとHugo DUFOURと彼らに絡む出演者によって実に自然且つ見事に演じられている。それらはinterviewのような本物ではないのだが、巻末のCULTURE FRANÇAISE（Parisや地方の見所紹介・朝食の風景・挨拶の仕方・ジェスチャー・チーズやワインの紹介・パーティーの様子・古式の糸紡ぎなど）からBONUS（出演者2人のNG集）に至るまで、総てが演出によってドキュメンタリーっぽく仕上がっている。小笠原洋子女史によるテキスト本体の綿密な構成とDVDの監修はもとより、フランス側の演出・撮影スタッフのコラボレーションの成果である。つまり、このテキストとDVDは互いに不可分の存在であり、DVDはテキストの援用附属物ではないのである。実は、こうしたテキストの出版は、これが初めてではなく、白水社の*Bonjour, Paris*（中山真彦・杉山利恵子著）がテキスト+VIDEO（la 3^e éditionではDVD化）一体化の本邦初の成功例である。

それにも関わらず、本書を採用して暫く経つと、白水社からCDが届けられ、曰く「ご採用の先生方からフランス語を聞き慣れていない学生にはDIALOGUE部分が聞き取り難いとのこと指摘がございましたので・・・」とスローモーション版のDIALOGUEを急遽作成したというのだが、それでは折角の本書の最大特色を否定

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

してしまうのではないかと恐らく学生諸君が聞き取れないのは事実であろう。しかし、テキストが手許にあるのだから、担当教員は彼らにそのように聞き取れる訓練をさせなければならないし、そうしないのであれば、このような *document authentique* 風のテキストを採用する意味がなくなってしまう。現実には在り得ない擬似（超低速度）フランス話 *Je ne sais pas!* や *Il ne vient pas?* が聞き取れたとしても、フランス人が日常会話で *Sais pas!* とか *Y vient pas?* と発話するのを聞き取れなければ、何の役にも立たないのだ。事実、筆者のクラスでも学生諸君はテキストを目にするまで、そうは聞こえなかったと感想を述べているが、逆に日本語をフランス人に教える場合でも、「わ、た、し、は、知、ら、な、い」とか「か、れ、は、来、な、い、の、で、す、か?」と抑揚もなく、ロボットの話すようなブツ切りの合成日本語を奇異に感じさせ、「分かんない!」とか「あいつ来ないの?」と発話されるのが自然だと感じさせるのが語学教育なのである。件の CD の作成を求めた教員の真意を未だに理解できないでいるのだが・・・

ともあれ、巻末の *CULTURE FRANÇAISE* の教育効果は絶大で、例えば *se dire bonjour* のコーナーでは、Pierre と Hugo がさまざまな挨拶の仕方を実演しているが、*se faire la bise* について、Paris では左右 1 回、フランスの南部では左右左と 3 回、北部では左右更に左右と 4 回、親愛の情を籠めて家族などが左（右）の 1 回だけの場合もある、社長と従業員は *bise* をせず、《Bonjour, monsieur le patron.》《Bonjour, jeune homme.》と握手をする・・・とユーモアたっぷりに紹介する。これに担当者が「この通りで、私も初めて渡仏したときは面食らいましたね!」とコメントを加えれば、説得力は倍加する筈だ。語学教育にはこうした文化的背景が不可欠であり、本書こそはその理想的 1 冊に相違ない。

これに反して、日本の英語教育の失敗は（この度の小学校に於ける外国語活動の開始でも一向に改まらず）言語が道具 *a communication tool* だという考えを維持し続けていることにあるのだが、言語が道具である筈はなく、言語 *la langue* は民族 *la nation* であり、文化 *la culture* そのものだという考えに立てないでいるのだ。大学に於けるフランス語やドイツ語教育が成功しているのは、教員組織がこうした観点を持った人びとで構成されているからに他ならない。

*

Le Japon, c'est cool! は教科書作りの名人藤田裕二氏の手になる至れり尽くせりのテキストである。全 14 課が、Paris の *Place Charles de Gaulle*（の場面を初め、背景は現地撮影の動画ながら、いずれも対話する 2 人の登場人物との合成画面だと直ぐに分かってしまうのはお粗末? 或いはご愛嬌?）で偶然ぶつかり合った日本人留学生の Yumi とアニメ好きの青年 Alex との Dialogue（4～5 行のスローモーション且つ演出・表情殆どなしで不自然!）で構成されている。各課に本文の内容についての Questions と Grammaire が設けられ、新出語彙を確認すべく *Vocabulaire* が続き、更にフランスの現代文化（とりわけ日本の漫画とアニメがフランスの若年層に幅広く支持され、それらが彼らを正統な日本文化へと誘う導入役を担っている）を取材映像で伝えるべく、*Civilisation* とフランスのさまざまな若者への Interview が附随する構成である。また、学生諸君の各課についての習熟度確かめるために「練習問題解答と小テスト」冊子も用意されるなど教員にとって、これほど使い勝手の良

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

いテキストも珍しい。しかし、内容が充実しているだけに、演出と表情なしの Dialogue の不自然さが際立ち、誠に残念ながら、こればかりは評価できない。

そういう次第で、文字通りテキストの附属品である DVD 冒頭の *Civilisation* では、Paris の街中を行き交う多民族を取材撮影し、Interview でも白人以外のフランス人を意識的に登場させ、彼ら彼女らに「Je suis français d'origine algérienne.」とか「Je suis française d'origine marocaine.」と名乗らせることによって、フランスが如何に多民族国家であるかを理解させる試みが成されている。これに関連して、フランス共和国 *La République française* の前大統領 Nicolas SARKOZY 氏が、ハンガリーの亡命下級貴族の父と、同じく移民であるユダヤ系ギリシャ人の母の間に生まれ、夫人はファッション・モデル出身でイタリア人歌手の Carla BRUNI だと解説すれば、教室のあちこちで、「まさかあ！」「うそ〜っ！」「フランス人じゃないのお？」と驚きの声が出るのは、やはり多くの日本人にとってフランスが未知の遠国であることの証左である。また、1998年発効の *le loi de Madame GIGOU* によれば、「フランスに5年以上在住し、フランス語を流暢に話し、公序良俗を乱さぬという条件を満たした上で、当局が許可した者」は、Liberté, Égalité, Fraternité の標語を信奉する *identité* を共有することで、誰でもフランス人になれる訳で、人種や国籍はさほど重要な要件ではないし、そういう法律などなかった時代に、フランスの最初の王となった Charlemagne こと Charles I^{er}, le Grand (742~814) は Franc (フランク人) だし、あの Napoléon Buonaparte こと Napoléon I^{er} (1769~1821) は la Corse の出身だから Génois (ジェノヴァ人) だと説明すると、歴史上の、そして現代の著名な国家元首が外国人である事実に学生諸君は思考停止状態になるようだ。要するにフランスでは人はフランス人として生まれず（とは言え、生地主義国家であるから、外国籍の者がかの地で子供を出産すれば、その子は直ちにフランス国籍を取得するが）、上述の3つの標語を自らの *identité* として体現することで、フランス人になっていくことを理解すれば、何となく納得できる話ではある。同じコミュニケーション主体の1年生の英語の授業で、果たしてこういうことが語られているのであろうか？

*

Pierre et Hugo は全18課構成とて、1年生前期(14回)は Leçon 0 から5まで、後期(14回)は Leçon 6 から9まで、2年生前期(15回)は Leçon 10 から13までを消化し、残りの Leçon 14 から18までは後期(15回)の français-IV を履修する国際コミュニケーション教育科生と有志の学生を対象として、最後まで授業を進めた。*Le Japon, c'est cool!* は全14課で構成されており、上述の如く Leçon 0 から3まで、Leçon 4 から7まで、Leçon 8 から11まで、Leçon 12 から14までを2年間で終えた。いずれも1年間で消化するように設計されたテキストを2年間で終えたのであるから、当然ながら、フランス語それ自体はもとより、文化面についても、附属の DVD に加えて、3年生配当科目『フランス文化研究 I・II』のために TV 番組を録画しておいた DVD や VIDEO をその都度援用しつつ、実にゆっくりと時間をかけて、幾度も同じことを丁寧に繰り返した効果は抜群であり、継続は力なりの体育系練習に近い成果を得た。実際、体育特待入試を経て入学し、当人が「脳も筋肉で出来てんねん！」と豪語していた学生は遂に最後までテキストの購入を拒否し続けたが、61点を取得、「先生、面白かったで！」の一言を残し、去って行った。